



  
 刀筆青砥石文  
 六

^ 13  
 3036  
 6止



門へ 13  
號 3036  
卷 6



刀筆青砥石文あとのいしを寫水箴語卷之六うらまのまゐり

江隱

曲亭主人筆削

洛客

樸亭琴魚原稿

第十套 人心の追難ひとこころ

五十子七郎いそご声高こゑたかくやうやう小云云こゝろと呼よぶ程ほどは中門ちゆうもんの外邊の外よりけりと忘わすれと獄卒ごくそく

ホ一お兩人に桔槔こけこを被かさるる偽いつはり二郎に且藏かつざうを牽ひ立てた簀子すしの下した推居おしたり。

藤綱ふじつなつつくく名草劇齋なぐさげつさいのの法師ほふし承う継つれれととみみつつるるの

名なとと呼よぶぶれれ各おの唯ひと々々とと忘わすれれてて共とも侶りはは額ぬかつつららりり當あた下した藤綱ふじつな声こゑをを激おどししややととれれ劇齋げつさい

汝なんぢがが墓はかをを被かれれらら彼かの妾めかけ躑つととややんん親おや同胞どうぱうももをを泥どろのの杖つゑ何なにれれとと保たもたたむむといいつつの

青砥石文卷六

比より使ゆる又その妻の病臥せしと幾日なり何の症也身ものりる巨細より  
 比にぞや向まて劇齋頭と權さひ件の礫の側室とあせむ家の目を任せし  
 正妻は異物にたよりて正地保人のけだ但木挽坊ある異杜との先婆の通礫が  
 親族をたつる里くつるを娶りし去歳の冬十月は山にたかく今茲  
 六月下旬六波羅殿の仰より小人筑紫へ赴たつ九月の十日に帰京して  
 この比より彼女子の言語忘答常かた乱心くと思へばさる日もあり小人が  
 長地旅初を待むより氣の凝りて引かせ病志ありんとせり人か家方の  
 配劑と服薬と勧めしその性湯液といふ嫌め果敢くあつ用ひ  
 とうくは程は十月某日は一タ更蘭人定まて渠の臥房と潜からん庭ある

井に陥りて果敢あくなり惜しは渠が送愛の件々を極め歎き葬を  
 ぬれおの世の費とせむる越度よとといぬる比廳の地叱りを被てほしく  
 後悔つるありぬとや藤綱をちめておれ劇齋目今あらせし如くあつ  
 礫が入水の横死をば何ぞ廳の鑑定と請せし葬すると処置あら  
 てもおほ怯む御定でいへども件の女子が病志の内外の人と食よく知れませ  
 その里くつる異杜も異種なく人ば釋氏の律は任せしとあせむ此らん  
 中を燈人多くと陳れれば藤綱かきひてあつてその燈人を抱てあつて  
 誰々どと再び問れてさい用意とせむるつる燈人とおほてあつて只  
 小人が後者ある密八といふもの年来の塾生に彼ものもよく知れのとや藤綱







同類かのごとくあれは何ぞさう陳べん。さうもせと氣色さう貫子の下中  
浅羽十郎縛の索引絞り速に首伏せぬ背を割骨を摧んかくても汝ハ  
おらさびやと腕直と掃揚れハ蜜ハ苦痛堪どく面を皺め身を及  
阿那苦一息を絶れや六六且く後々あひと泣つて勸解く膝打布地薬中  
既ハ搦捕れく露頭のうへ脱れがう現被りのがおもせ小偽りの小入日  
あまの愛妾磔をあひを運しく口説ありが渠ハ只強顔のそと本意は遠に  
ある小前月某日真夜中比夜被女子ハ井ハ落て身ありが人ハあつたぬ心の  
哀さうもあつたかた送葬せよの甲夜ハ劇齋竊ハ小入と閑室ハ招  
よせ汝ハあつたあつた旅宿の苗守の程阿磔ハ偽三郎といふのと密通月旦

累う彼偽三郎ハ汝ハあり蓮華院の食客之云如此の證據あり許は汝奴  
原ハ終に海外聞と顧て怒とせあつたあつた夜さう阿磔ハ教訓をうらうバ  
渠ハさびや羞うけん忽地非命ハ終と取れり今さう不便ハあつた憎ハ死ハ  
偽三郎ハ官府へ許ありと怒と後さんと欲せられ暗れ恥と明はの所詮  
竊ハ陥れ官府のさう借りと這奴を救はよおさうか。その謀ハ箇様々  
如此くと其は下ハ汝ハ豫て知さう蓮華院の薬中とされ日工あり  
は押着おら潜さう渠と相譚副中ハ為課せよ努力ハあつたさう遠  
つあろとゆさう砂金四五兩遞与されう小入ハ阿磔ハへんくを被る小  
彼偽三郎奴ハあつた密通せよとさう婿はと限りあつた胸ハ浅間の獄を

青底の文

燃るが火憤りの後の祟とかへりる。異機もく兼引て馳て蓮華院は走り  
 火竊は葉中と誘引中と遠く四條の酒樓は起死渠を飽きて酒を盛り  
 られも飽きて飲食を彼密計と説示し相樟深せて相共は酒樓をゆれば時  
 刻より子三刻の比よりぬかて三條まで来る程に葉中が町家の檐下の  
 桶より小便垂るを待て。於てほろり立在る後方よりあるものあり心も  
 あらで月影のつらと透しえれ。その人へ別人か。この年来睡しぬ同塾の  
 且藏が藤白よりかへり来る。既に解らる人か。這奴字向を鼻よりけく左に  
 右よりれと侮る面と又さけゆきま脅して遊んとあへハ葉中は其は町一町  
 かり遣り過し前後より走のかり引倒さんと胸前を捉る。進て懐の

財布を傾て引びとる。奪取し一歩跡を暗し逃と死か。葉中共信は  
 蓮華院は起死。財布の金と揚るる。沙金拾五六両あり。その中四両は葉中  
 分與へ。丑三刻の比墓所の由りて阿珠が柩と掘り死内は飲り衣裳調度と  
 送る。引びつ小鏡と鼻紙挿と石畳の邊に捨或ハ又偽二郎が部屋  
 外面杭根の辺に捨。葉中と共に彼部屋の籬笆の破れより窺へハ  
 裡面は燈火幽ゆ。障子と半開たる。ほろり一箇の行李ある。その  
 時の時、偽二郎は引びり。葉中身と起。く外はゆき。葉中物蔭を避躲れて  
 且く葉中遣過し何処へゆく。飲と目送れが墓所のく。起たる。この際、  
 と其はあて葉中と外に立在せ。小入の裡面に入ると。葉中行李を推ひ死彼棺



中より出て来りし衣裳櫛笄をどと底のこゝに推納れり故の如くも覆ひし舊  
 如く索を被て遠く走り出薬中共侶彼寺門の守屋を退り餘れる衣の  
 薬中より且秘指と預けつ富巷路をか程は八声の鶏の數鳴ぬかその  
 詰且蓮華院より使僧来て云々と告ぐ小人の劇齋は俱せられし寺に  
 赴た外面を成る打りし食堂のほとり不且藏が困り果る面色しとされ居る  
 と訝し當一當て事情をあらとあひく大庭は渠と捕へるの懐あり  
 昨々を捨り小鏡の頭れ半の意外の幸ひ是奴も賊に陥れ奪ひ金の  
 後吐患と尋思は声と仰り立て罵り又引捐り客壇へおのり云云と  
 告る小人劇齋も亦さふがよ意は協ぬ且藏が事と虚実とあつる偽二郎と

同類の濡衣と被せり又且藏と劫と奪界被金の淫酒の為は用過しとて  
 一銭のいふを罪惡今後悔の甲斐あるれどもあつるせむおれ  
 皆是主人は分付られ推辞する所の所行れが命を助けさせたりと勧  
 解れが薬中も亦跪せ今蜜八が首伏は毫むるも偽りや小人の劇齋と年  
 来の別添はあつる比彼人は唯一雙の草履と賣て方銀一片惠れる  
 是頃よりして疎りた其の密八もそのりせれ相共は彼新墓と費たり  
 とも辛苦銭の多くもむるは本人の劇齋の密八はそれかむれ小人が  
 一命と助けさせ多人との翼くといはるあは藤綱の可とうち笑ひはる  
 露頭よ及ぶと谷と穰りてその頭と繼れんとあふ思ふ再び多言はるとあつれ

あつた。禁ちの偽とええり。かれは且藏の罪なり。傳と解せよ。五十子  
七郎の首と獄卒ホト傳へ。柵指傳の索も釋る。天の冥福よ。心死下司も  
みか。只顧感嘆あつる。この死も劇齋の只平伏せり。藤網を信と  
え。奸賊劇齋頭を奉よ。汝の心葦くも偽二郎を陥れ刺このと。來隨從  
せ。且藏を誣と殺さんと謀り。その殘忍甚し。蜜八があせし如く。  
姦夫の恨もよ。偽二郎を謀り。殺と問れ。やうを頭と擡憲断の灼  
然。密謀あつて。罪と脱す。あつても偽二郎が密通の證據  
分明。渠が自筆の詠草の硃が護符。裏あり。故よあつて。硃を教  
戒せり。慈悲あり。仇とあり。被妾の自殺せり。これ亦共侶を走らる。

いと恨る。偽二郎が所為なり。おれども訴あり。是非を憲断する。死の  
外聞を脱す。謀りて。云云。巧を。あつて。死の怨り。やとくも  
わ。おれ入り。飾を藤網。冷笑ひ。證據の蹟。何処ある。とく  
え。おれ。劇齋の懐中。置紙を。搦撈り。廻これ。と回報せ。か  
さ。おれ。五十子七郎。け取。て。投。き。つ。茶。く。左。心。の。こ。ま。り。進。れ。が。藤。網  
業。よ。あ。の。せ。と。偽。二。郎。が。自。筆。よ。せ。よ。の。期。及。び。く。偽。り。飾。る。を。医。生。が  
あ。ぞ。と。これ。あ。と。と。あ。の。死。故。の。西。國。より。歸。京。の。翌。朝。偽。二。郎。が。送。れる。揚。枝  
番。磨。よ。り。姦。夫。あ。つ。と。察。し。の。後。下。女。の。匙。を。威。し。硃。が。奸。夫。の。偽。二。郎  
あり。と。定。ま。れ。と。知。る。と。死。匙。は。通。り。偽。二。郎。が。硃。を。贈。り。詩。奇。と。初。て

竊見らるらんとの折匙を劫引ゆと鴨河は突落し還る匙の逐電せし  
ととの母異社を召よる時日を限る邪怪の催促ぶの四せといひよあがぶの  
残毒どりと推せ六磔ども汝が竊殺しと井に沈め疑ひやかともあつて  
幸て水火の責をいひたしつゝ明の肺膽をさぐりい富れと劇齋の  
唯と心よりよかへぬと肚裏よあつてこの人四聴八達の方識ありとせよの理言  
あつたり匙と磔とを殺せよの密入せよあつてあつて知られんあつても  
死入よ言やと推量といわれ偶中あらん脱走くハ脱れどもとあひ  
之く曾推鎮の所擬でいふ心人の心と磔と殺せん況匙と鴨河へ推沈せよ  
恨あつて諷らん身より是の心といふも果は磔と疾視不敵の癖者あつ

偽らぬ浅羽十郎彼めいどとくよと下知されが用意をあらうけん中心のや  
も既し牽を置る一匙が帯は縄を加へ一個の獄卒を牽立ての母異社が  
左右の腕と歩卒兩人會押へる貴子の下は並居れば劇齋の胆を冷し魂の  
身を添へて慌れぬと立んと藤網へいれんとあつて彼待りよと  
声どかれが五十子七郎横膺拂く貴子の下へ筋斗の地響はるも投降せ  
浅羽十郎衝と寄せく忍地索と被せり藤網再び倍と疾視劇齋かとも  
偽飾あられ上洛のそめり長時朝臣の密意あり汝が許の趣と勘察と  
偽りあらんよとあつて五十子浅羽の西光黨を汝が近鄰に遣ふ  
彼磔が保人の杉木挽坊の異社に且その異社の汝が家の炊妾匙が母と





立て官府沙汰は及やも勝を取るとかろん毛と吹た疵を求人より且く渠を  
 隠し置け時宜よりとくもかくも又せん志のあつたやとあひ入しく借やうよ  
 やせ相識柴賣許憑え匙と遣しつれ身あつた渠が往方の絶て  
 ちを偽りく勸解つて日と過は程は阿碓は夜深に井は落て身あつた  
 告りた原来彼事發覺れて脱す路のあつたよ自殺あつた痛し  
 多への影獲くても柩をえも送り病は假托疎遠しく又のむくの  
 日と送ればあひあつた殿の問注所へ召させれば彼條の二五と問せ  
 脱れくても遠くやあげく哀しく夫背へ遣せし匙え召捕られくも場  
 ちを牽れぬとも人のあつた恨と愛の可愛は女兒小とあひ入しく目と

拭へ奸智は長る劇奇は竟は偽の路絶く今かかとあひけん觀念の眼を  
 せやく浅羽十郎より対ひ小人一時の愆やく人と損ひ身を成し後悔あよ  
 ちを嚮むやあげく恩愛正妻は異あつた側室を竊れ恨た  
 ちを小人年来廣言くも人を欺くとも人のあつたを欺れどいつつよの  
 奸夫淫婦の罪悪と明く地は正とて第一番は小人が世の胡慮はありぬ  
 べし又這奴小と欺れ後くこの憤りを釋んどもとあひけれぬを  
 告る匙と鴨河は推沈めつ渠が口あり漏れどとありその後蒙汗薬と碓と  
 酔く夜竊は逃る車井は投入する更は奸夫偽二郎と陥まん計り  
 蜜八葉中よがもせし如くあれども件のあつた女子どもと害せよ腹心

蜜ハまきりあせざりし小尉の殿藤綱の聰明あつめいあるをいふ異杜母子いりおやこを捕へく。ミダ  
 密策みつさくとあせあひ鬼神不測おんしんふそくの業驗あやぶみとあまさんゆかころべし死せりとあひ  
 匙しハ生なまて渠みちあり事ことの頭あたまれぬ誰たれと恨うらみんすもけ。あつめをあせあひを竟つひは  
 首くび伏ふせりける藤綱ふでつなこれとあつて劇齋げつさいが首くび伏ふ甚し遅おそく汝みづかハみづろ賢けんことして  
 恨うらみと飾かざるの故ゆゑは羞はにかむと厭いとむく罪つととゆへ入いは恨うらみとあつて身みを縛しばる索くわを被かと  
 羞はにかむれり大おほい且かつ医いハ仁術にじゆつありあつて不仁ふじんとみと人ひとを害がいと謀まりし  
 抑おさへりあつて又また汝みづかが各おの番ばんあり長旅ながりの宿しゆく守まもる女子むすめをりし任まかせ給たまは  
 奸夫けんぷと引ひ入れて忽たち地家ぢけを倒たせし至いたり言葉ことば巧たくまし非ひと飾かざり衆人しゆじんを欺あやたり  
 日月にげつと共に限かぎり暗くらむと照てるあつて官府くわんぷと欺あやたりゆや嗚呼あゝの白物しろものと

叱ち懲ちやうしく又またつりいどをまきりつとれ偽いつはり二郎にらうと呼よぶれが獄卒ごくそつ間ま近ぢかく牽ひきとる  
 當下たうげ藤綱ふでつなハ劇齋げつさいが進ませし詩歌しかと再またび讀よみとこれハ汝みづかが跡あと致いたり問とへば  
 脚註きゃくしゆの如ごとくと答こたへ藤綱ふでつなはさあつて趣おもむき甚し遅おそく汝みづかハ墓かぶと覆おほむ  
 外ほかに盗ぬすり初はじめられたるを嚮むかへられ訊きかれ盗ぬすせりやとせり旅たびせし人の  
 宿しゆくと窺のぞひ罅ひま隙ひまを鑽あぐりて妻さい妾めかけと密通みつつうし且かつ暮くれし人の飯いひを食くひ且かつ  
 暮くれし人の酒さけと喫くむ人の臥房ふしふとまが臥房ふしふとて遊戯ゆうぎとて三さんヶ月げつこれを盗ぬす  
 賊ぞくといふ人ひと死しや汝みづかハ人の側室そばむろと竊ぬすり又また人の酒食さけと盗ぬすり居宅きたくを竊ぬすり  
 朝あさの一朝いちぢやうの賊ぞくはあつてその罪つとを覆おほり絶たく輕重けいちゆうなれり之これ無む慈じの  
 癖くせ者ものと叱ち懲ちやうせむ偽いつはり二郎にらうハ理りは伏ふし返かへり辞ことばはあつりけり且かつ頭あたまと握にぎり密通みつつうの





鎌倉の鐵の觀音堂より。阿彌と挑し夜腰刀は附けし山鶏の  
 鞆脱て渠が懐は落ゆり又渠は濁水の井をゆり落し人かまはるるかて  
 夥の年々も彼再會せし夕あまのの首密合し情愛の浅くは阿彌  
 今茲も件の鞆と失ひ紙は捻りて秘蔵せし紙は虫糞掛りて一首の  
 歌と流しし小人の歌のありと定まらひぬれども歌ハ素盞雄尊の八雲  
 川出雲八重垣よりありしが夫婦はあはれ祥よとそと人か憑しくひひふ  
 あづか帰京の報知は驚死猛り別去んとせし死彼虫糞の歌ハ滅く舊の  
 白紙はありし阿彌ハ怪疑多く放遣する忍びぬれ頻に誓紙を求めぬが  
 小人渠を慰めし彼鞆の白紙は云々の詩歌と写し誓紙はやく取らせしあり。

又別をせし前夜は小人奇の夢をよそり壁の磔と小人と鐵觀音堂に  
 首觀音の頭顱忽地は俗髪よりぬれ面影小人は似るやうかくてその頭の顱ハ  
 けづる軀は續て全體具足は拜れぬを又忽地は散碎く水とあり。  
 流れて跡のありぬれども怪死夢れども夫婦ハ一體分身し軀はそれハ  
 頭顱小人は肖さをめりて全身具足と見えぬ阿彌と飽別とほむ程  
 勿く相合し夫婦とあはれき祥あるその水はなりて失ひハ今の煩惱を流し  
 歡びと迎る祥を彼れ占しこれ占しゆの憑しくひはみか空をぬれぬれが  
 藏し善夢も人迷りのものなりと曉れが悔しきと又ハ藤綱あはれ感へる  
 りか惑へるか恥とある白徒は解示さんハ再益かきと色を好む利は耽る

世の為許人よこひやくしにんが歳としの為ための中なかもなれり。と云いふ。聊論りやうろんは劇齋げくさいへのちと知らせや。  
 汝なが一旦いつたん惑溺まどくせし隙ひまが素生すせいと尋たずねれば、廻まわりて汝なが兄あにと云いふ。鳴な影かげ屋や湯ゆ治ぢが後妻ごさい。  
 水石みずいしといひ、淋婦しみんあり。件けんの水石みずいしの鎌倉かまくらの破落戸やぶら佐栗さぐり平へいが女児にょごあり。と湯ゆ治ぢ。  
 借財かいかいの代しろとて理ことわりあり。これと娶めとりし。小蘆頭こあしづか吉きちといひ、無頼漢むらいかんの水石みずいしが密夫みつとのよ。  
 あり。又また七竊しちせつは誘よそ引ひびく走はまるといひ、むかひに鐵觀音堂てつくわんおんどうの辺へ中ちゆう追隊おひだてれもの。  
 ども追詰おひつめられ。蘆頭あしづか吉きちの傷やれり。と詠えいの庭にわを牽ひかれり。觀音堂くわんおんどうを偽いつはり三郎ざぶらうが。  
 因よに水石みずいしと犯とがせし。もとの宵よのうであらん。と云いふ。劇齋げくさい駭おど然ぜんる眉まゆと。  
 聲こゑもく。嗟嘆さたんし。原来げんらい阿磔あせつの兄あにの離別りべつせし妻つまあり。多おほく軟弱なんじやくのひを。と云いふ。小  
 羞はく。回答こたへとせり。藤綱ふじづなのことも。と云いふ。又また偽いつはり三郎ざぶらうの對たいひ。汝なも。と云いふ。

この薬中やくちゆうハ當初あづまじゆう鎌倉かまくらを追放おひなげせられ。水石みずいしが密夫みつと。蘆頭あしづか吉きちの面おもてを撲傷うちやぶ。  
 されし。あつちの交參かうさん始はじめなり。彼か此こを流浪りうらうし。と云いふ。近ちか比ひ都とは赴おもむき。蓮華院れんげえんの守まもり。  
 生道せいだう人にんなり。りる。なやみ。状じやうと改かへり。讚佛場さんぶつぢやうより。夜よ夜や。調しらべ。調しらべ。つ。と云いふ。  
 心こゝろも醜みにくき。顔かほの瘡毒そうどくにあり。と云いふ。形かたちのう。鬼畜きじやくも等らうしく。なり。ゆり。の薬中やくちゆうハ鎌倉かまくら。  
 也なり。辛からしく。竊ひそかに。水石みずいしと偽いつはり三郎ざぶらうを犯とがせられ。且かつ彼か磔せつハ水石みずいしあり。と云いふ。夢ゆめ中ちゆう。  
 あつちの。劇齋げくさいが。悪わるく。與ともり。と云いふ。墓かぶを。覆おほり。水石みずいしが。罪障ざいじやう重おもく。あり。死し。  
 後ごと。又またども。天あまが。免ゆるみ。故ゆゑの。密夫みつと。衣えを。剥むれ。と云いふ。尸しかばねを。曝さらし。抑おさへ。今いま。く。日ひを。恥は。  
 亦またこれ。より。大おほく。な。礫れきが。水石みずいしの。う。な。れ。異い。杜と。問と究きゆうせ。と云いふ。実まことを。始はじめと。又またい。ぬ。目め。  
 藥中やくちゆうと。搦捕なつとし。て。熟視じやくしれ。が。彼か。蘆頭あしづか。吉きち。言ことを。く。似に。と云いふ。素生すせいと。責問せきもんせし。に。と云いふ。

















此の如く懲りて裁断せしむる果はけり。かくて幸々その免さるる暇もあらず。  
 藤綱の廳より罷りて長時朝臣は對面しつ。梓送もあらず。告ぐ。長時朝臣は  
 感悦しく款待せし。浅く。乃て劇齋偽二郎と誅せし。と。その事  
 是の如く。不時の赦を被りて死罪一等と降され。速に嶋峯に流されり。  
 これより先は鎌倉の將軍頼朝朝臣の故あり。職を罷られ。三年後  
 嵯峨院の皇子宗尊親王と征夷大將軍は拜仕し。鎌倉へ下されり。  
 此の如く。前攝政藤原兼經公の女と執權北條時頼の養女と。北の  
 方を備ふ。かくて件の北の方この時懐妊あり。既五ヶ月及べり。安  
 産せし。祈の為京鎌倉に赦せし。輕罪人の放され。重なる死刑を宥らる。

されば劇齋の薩摩馬の鬼界嶋蜜八の硫黄嶋偽二郎の澳の嶋中  
 水嶋へ配流し。是は佐渡へ流し。と定まれ。異社におく。赦されて都に  
 重病あり。囚徒を療治せし。絶よ七日許中。一人も送ら。瘡の如く。當下  
 藤綱の長時朝臣は相諱し。かくて旦藏と問注所へ召せし。療治その  
 效を奏する。この速に賞禄と。沙金拾五兩を賜り。且旦藏則  
 この賜も。衣食調度を購求め。これを劇齋に贈り。遣。且身嶋中  
 後ひゆ。且暮の艱苦を扶へ。只管願わめ。劇齋不良。非如  
 り。汝を害せんと。既これ分明。今。何の恩義。汝の非如

徳をりく怨は報んと欲せりとも律の場の許さる所なれば隨後の願ひ  
かかると但その恩賜の金どりの劇齋は衣食調度を贈遣えと願ひしを  
曩に蜜八は畧奪られ金を貰んと為るべければこの一條の許容せざる故が  
隨意とて之を免許の状を賜りしれは且藏は拜舞して国恩を謝したり。  
即日淀船より乗りて次の日浪速に赴けり彼件を購て之を劇齋が  
舟より乃ち打ち水主へ順風をればとて出船の貝を吹立るとの浦わくと  
且藏へ劇齋は對面と年来の恩を謝ししを期が死離別の涙を  
流すべし劇齋は今もに慚愧後悔して回答せよはば於此に船路を交はれ偽言  
薬中蜜八は且藏が忠心をなすに就てはくまの死不良の心を轉て先非と

悔く多かるがとて死なむはつれは竟に復を解せしむあつて配所は赴き  
劇齋が不義中へ富巷路の富るも金銭器材はばとて家も庫も毀れて官へ  
取られ由守ある傭人小のあつて禁獄せられ日ありや捨て置れ去られれば只此を  
守る程この日やをく埒あはれぬが宿所をかゝるもかりし程は且藏が忠  
信の事の趣を多く京浪速は風聞して嘆賞愛敬せざるはあつて富るものへ資  
財を贈り病者へ試よとの療治を乞けるは難病劇疾立地は瘥らばとて  
とて。あつてとての医療日よあつてつれは京浪速は往來せしむもの  
その居宅と下は寡慾ありと施を好む餘あれば必散く貪りしものを聚  
けりかゝるとの次の年は四月の比鎌倉の將軍宗尊親王の北比方久しく

徳をりく怨は報んと欲せりとも律の場の許さる所なれば隨後の願ひ  
かかると但その恩賜の金どりの劇齋は衣食調度を贈遣えと願ひしを  
曩に蜜八は畧奪られ金を貰んと為るべければこの一條の許容せざる故が  
隨意とて之を免許の状を賜りしれは且藏は拜舞して国恩を謝したり。  
即日淀船より乗りて次の日浪速に赴けり彼件を購て之を劇齋が  
舟より乃ち打ち水主へ順風をればとて出船の貝を吹立るとの浦わくと  
且藏へ劇齋は對面と年来の恩を謝ししを期が死離別の涙を  
流すべし劇齋は今もに慚愧後悔して回答せよはば於此に船路を交はれ偽言  
薬中蜜八は且藏が忠心をなすに就てはくまの死不良の心を轉て先非と

不例ふれいよりしくく日ひみく重おもしむるあまの臨りん月げつへ近ちかつ死しを御ご産う心しんをとなす  
 在あ鎌倉かまがらの医官い官へまゝま京きやうより名な医いと召め下くだしくあつて医案いあんと献けんせ又また有あ驗げんの  
 高僧こうそうと宮中みやちゆうは屈請くつせいして加持かぢせを更さらども絶たく驗げんへあつてりかりし程ほどは北きたの方かた  
 一夕いつやくの夢ゆめは年来ねんらい信しんしめあつて清水寺しみずでらの觀世音くわんせいおん忽然くつぜんと枕まくらより立たて死し身の病びやう著あ甚しん危き  
 ちかく熊膽くまたんを用もちひぬ然しからぬ全快ぜんかいと示しせぬあつて三夜さんやも及およべり既すでわく  
 件けんの靈夢れいむと外様げいさうは披露ひろうありぬ執權しやくけん時頼ときたのり朝臣あその沙汰さたとしく典藥てんやく  
 尚藥しやうやくの旨しめと傳つたへちかく熊膽くまたん劑ざいの丸茶がんぢやとくあつて命いのちせしる医官い官ホ  
 承うりく眉まゆと擗ひり北きたの方かたは病惱びやうなうの素もとあり熊膽くまたんの症しやうよりあつたあつたも  
 台たい余あれ重おもいぬがとく熊參丸くまさんがんとあつて七しち日にちも及およべりれ將まさらぬ效きやくあつた  
 台たい余あれ重おもいぬがとく熊參丸くまさんがんとあつて七しち日にちも及およべりれ將まさらぬ效きやくあつた

より医官い官ホほはそれそれを熊膽くまたんへ死し症しやうは相あ応おうしくば今いまは早はや熊くまの胆たんと除去てきぞと  
 乞こふ程ほどは北きたの方かたは初はつめとく靈夢れいむ亦また復たがひ三さんび及およべりそれそれをみまわつてとく時頼ときたのり  
 智ちの親族しんしゆく評定衆へうていしゆうと召聚めいぐ合あひの意見いけんと問とれは皆みな惘然むじやんと辨わとやこの  
 次つぎ青砥せいぢ藤綱ふじづなの畿内きいの勘察かんさつ事じ保たもて鎌倉かまがらへ還かへりてその末席まつせきは侍さむらいりて  
 時頼ときたのりれとえくく其許そのこよりあつて考かんがわつたあつて向むかは藤綱ふじづな  
 額ぬかとつ死し見けん訊しんは死しバ愚意ぐいを述のべん彼御かのご靈夢れいむの熊膽くまたんハ茶物ぢやぶつのみあつて  
 熊野くまの且藏ぢざうと呼よび醫師いし今いま京きやう撰せんの間まはあり渠そのの性忠しやうちゆう美みし厚あつし去歲こぞの  
 冬都ふゆと苗様なむさうはあつてり下官げ官則すなはち六波羅殿ろくはらでんを代しろりあつて渠そのが冤枉えんかうと  
 釋しやくよりあつてり人ひとの療治りやうぢは經驗けんげんあつてり大おほくをたれを知しれりその

姓名をも推し恐く示現の熊胆ハ熊野且蔵（おんざう）が御下し  
その湯液をそまふせあつたとき時頼（ときより）の譏（ぎ）任（まか）六波羅（むつろ）首（かみ）と  
往（まゐ）返（かへ）夜（よ）と日（ひ）継（つぎ）りたれ且蔵（おんざう）六波羅（むつろ）より快輪（かいりん）に乗（の）せしめそり鎌倉（かまくら）参（まゐ）  
るととき時頼（ときより）これと宮中（みやちゆう）より召（よ）入れと診脈（しんみやく）のち地味（ぢみ）を調呈（てうてい）と命（めい）せし且蔵（おんざう）  
あひひ免（めん）合（が）命（めい）より畏（おそ）り之（これ）只顧（ただみ）し辞（ことば）しもうせしと許（ゆる）さるわが已（いま）と  
ぬぞ医業（いげふ）と迷（まよ）く湯劑（とうざい）と調進（てうしん）と程（ほど）は只一貼（ただひとて）ゆき北（きた）の方（かた）は病悩（びやうなう）と  
ぬひ三日（さんじつ）ゆき病床（びやうばう）と望（のぞ）む七日（しちじつ）ゆき本復（ほんふく）あり且幸（またさい）ゆき御胎（ごたい）  
恙（あや）のりしと諸司（しよし）ハと医官（い官）ホと無双（むしやう）の国（くに）と称（な）り況（いは）して將軍（せん）執権（しつけん）の  
免（めん）歎（なげ）ひハ大々（たいたい）終（は）る且蔵（おんざう）ハ三百貫（さんひやくくわん）の莊園（しやうえん）と賜（たま）り侍医（しやくい）より召（よ）加（か）え北（きた）の方（かた）

御安産（ごあんさん）也（なり）日夜（にちや）営（えい）中（ちゆう）は倍（ばい）々（々）と命（めい）せられ休息（きゅうし）所（しよ）と宛行（えんぎやう）は藤綱（とうきやう）も  
免（めん）占（せん）夢（む）の賞（しょう）と物（もの）あつて賜（たま）りけり當下（たうげ）且蔵（おんざう）ハ恩命（おんめい）を謝（あま）しちりて希（ねが）ひ  
あつた其短（みぢ）才（さい）ちりて寵恩（ちゆうおん）を被（おほ）るは原是（げんじ）劇齋（げくさい）が傳授（でんじゆ）されり  
あつた吾師（ごし）劇齋（げくさい）ハ罪（つみ）ありて配流（ばいりゆう）され今（いま）ハ鬼東（きとう）鳴（な）り在（あ）り願（ねが）ふハ恩賜（おんみ）の  
莊園（しやうえん）と返（かへ）しちり九（く）此度（このたび）の恩賞（おんしょう）ハ劇齋（げくさい）ホと免（めん）させぬと望（のぞ）足（たり）り之（これ）ハ  
あつたやんを時頼（ときより）嘆賞（たんしょう）侍（しやく）々（々）ハ時（とき）遇（あ）ひ功（こう）は誇（こほ）らむ已（いま）と虚（うそ）とそ  
初（はつ）と忘れざるハ仁人（ににん）の心（こころ）賜（たま）る所（しよ）の莊園（しやうえん）ハその終受（しゆうじゆ）され北（きた）の方（かた）の安産（あんさん）の  
免（めん）禱（たう）とくハと赦（あま）りしと赦（あま）りしと首（かみ）とちりぬと諭（さと）し且蔵（おんざう）を退（ひ）る  
その後（のち）六波羅（むつろ）ハ赦（あま）りしと傳（たづ）令（ま）薩摩（さま）河（か）流（りゆう）人（にん）劇齋（げくさい）ホと放還（はうげん）はとぞ

御教書と遣さる有然程は五月よりその望の日は北の方御産の氣  
つせぬひは若君誕生ありけり免湯液の形のごく熊野且蔵うけありと始終  
調進ありし御母子共は健子をゆく肥させあはれ將軍の元歡びに  
執推時頼朝臣の為は北の方の養女若君の外孫且蔵が忠勤と賞せしが  
あはれびと猛法橋を補せしを禄を増し第と賜り且宣も若君且蔵の  
心端く初端はよりその技亦端しその三の端は神明仏陀の  
擁護ありえ彼裸體の厄を難この福を迎へり今あり且蔵と更り端三  
法橋と称ししを御多ふ有は栄光あり知らぬも驚嘆といは教と  
いぬやかれは端三の任重く務もそのかりけれ入て吾師を迎んとその

六月の七日あり心利を兩個の家僕を浪速津に遣せしは七月の七日は  
信あり劇齋偽二郎薬中蜜ハホ同帆く帰洛の船中日向国細嶋の  
澳つて山雞瀬と名離やく暴風よあかく船覆り忽地魚腹に葬らる  
但その迎の官人と水主揖取ホハ三枚を携り品を政登と僅に  
過船の助をたき恙ありしその趣京鎌倉よゆその端三浪速まで  
遣しえりけり兩僕いづれも来り来り端三ハかくまひ心を盡せし甲  
斐もむく忽地望と失く愁嘆氣色は頭れハ藤綱これを慰む法橋  
さのて歎かせと劇齋偽二郎四個の流人ホの程もかく救はわひあつ中国  
あはれぬやあ著る破船よありて送るものあり西の水屑とありしは是









かの後達一々青砥河の賜とて藤綱が家の病用ハ駕と疎むく遺  
 ざるをく又その謝物と受ざるをこれなると在鎌倉の武士医官増縁と未  
 りの妻よりその中は二階堂入道の女見元賢とゆえ一とこれと擊りて三男  
 二女と奉りその子ども成長の後長男は家業を嗣しく且三と名告らせふ  
 身ハ致仕隠居しく水嶋居士と號しなり。山鳥の水は濁る歳の意を  
 亦後水嶋居士端三といひり鎌倉を辭し去り且く都を杖と駐り蓮華院は  
 劇齋ハ墓石を立て祠料を寄せ紀の藤白は起たけいひり物と贈り  
 里人は厚く酬やく劇齋が送田と向む別は莊園と購求め名草が苦授  
 所と其の親族の子は分與へく劇齋が名迹と文とを謀り程よく還首日と

累く死病を濟ひ貧窮を賑ひ終は舊里熊野に還りて父祖親族の墓を  
 祀り多く里の貧人を施し一錢も送し貯む熊野は閑居しく二百餘歳となり  
 一とどの子後の且三は鎌倉の將軍は仕ありて医術を多く親より傳はるる二男三  
 男ハ武藝と好むるが新は召されたり武士ありつかりて子孫をまるとりけれ  
 繫昌は方ハ一夫医ハ仁術中々人の司命なりこの端三法橋のありと念を  
 才をのむ扱は誇り勢利熱中あり奔走共なる慶福ありとをたうたふなり  
 附之編中の画は今や丸衣裳調度あり煙管社杯亦是之文も亦これ準じ四條  
 河原の段との他あり或ハ画工の筆は伴ハ原稿の意は後め者官替りとも  
 刀筆青砥石文寫水箴語卷之六終

飯台

曲亭馬琴編削



平安

櫛亭琴魚原稿

武江

鈴木正造 浄書

画像

歌川國直 繪畫

劇人

朝倉伊八 刊

○家傳神女湯

婦人諸病の妙薬第一産前産後一包代百銅

○精製奇應丸

大雅の奇効を云々一包代百銅

○婦人の産科の妙薬

つねにハミヤの産科の妙薬一包代百銅

○真方熊胆黒丸子

熊胆汁とカキとクマクマとクマクマと一包代五分

江戸

元飯田町中坂下南側中程四方みと店向  
同家神田明神下山本町筋東新道大竹あり 龍澤氏製

取次所 江戸芝神明町いづみや市薬 ○大坂心齋橋筋唐麩かひちを太介

椿説弓張月

曲亭翁著作 全部五編二十九卷

青砥藤綱摸稜案

右同作 前後二編十卷

夢想兵衛胡蝶物語

右同作 前後二編九卷

歌討裏見葛の葉

右同作 全五卷

招竹大日記

右同作 大を新校あり本已の冬より出さず

秘笈名方

神田滝沢與継宗伯纂輯 近刻

医家人名録三卷龍峯主人の蔵板江中醫師の姓名居宅を考る及便利の云々

文政

大坂心齋橋筋南久太郎町 泰文堂 鹽屋長兵衛

四年

全同 所唐物町 文金堂 河内屋太助

辛巳

江戸人形町通新乘物町 雙雀堂 鶴屋金助

孟陬

全 日本橋砥石店 文魁堂 大坂屋茂吉

癸巳

全 本町通東入橋町二丁目 青林堂 越前屋長次郎

書房

全 本所松坂町二丁目 平林堂 平林庄五郎

御加ねは び 美艶 えん 仙女香 せんぢよこう

一色四十八孔

此の御加ねの御保十年二月の船主伊守九と云ふ人  
も湯偶居の時丸山は全盛中近江や美野と稱せし御受  
奇代の妙や之功能の包紙よりくまると○十色以上を  
とすといふ三世居後者自筆の扇子は御物より上は用のせいの  
湯のり紙は後者各前法好しと云ふ

調合弘所

江戸南橋弘所二丁目  
いさる本氏製

いさる本氏製

イサ

